

# クメール語を母語とする日本語学習者における 日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について —人為的事態の場合—

杉 村 泰

キーワード：日本語教育、クメール語母語話者、人為的事態、自他動詞、受身

## 1. はじめに

本研究はクメール語を母語とする日本語学習者（以下「カンボジア人日本語学習者」と呼ぶ）における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択意識について、日本語母語話者（以下「日本人」と呼ぶ）の選択と比較して論じたものである。前号の『言語文化論集』37-1では“電池没電了，所以表停了（電池が切れて時計が止まった）”、“因为风很大，烛火灭了（風が強くて蠟燭の火が消えた）”など内発的変化や無情物の作用を表す「非人為的事態」の場合について分析した。これに対し、本稿では人が動作主となる「人為的事態」の場合について分析する。

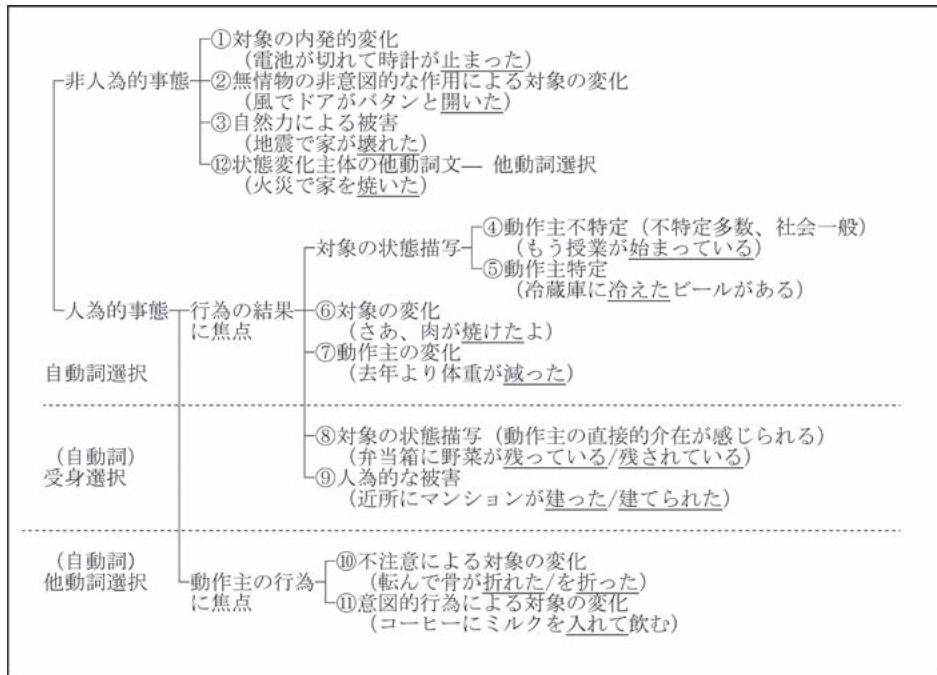
## 2. 先行研究

先行研究に関しては杉村（2015c）で論じたので、本稿では割愛する。

## 3. 調査の概要

本研究ではアンケートによる自動詞・他動詞・受身の選択テストを利用して分析を行う。アンケートは図Aに示す12の事態にそって合計60問作成した。各問題は例(1)のように被験者に格助詞「が/を」と「自動詞/他動詞/受身」の組み合わせのうち最も適当だと思うものを一つ選択させるという形式である。このうち、本研究では人が動作主となる「人為的事態」のうち、図Aの④⑤⑥⑩の事態について考察する<sup>1)</sup>。

- (1) さあ、肉（が/を）（焼けた/焼いた/焼かれた）から食べましょう。



図A 本研究における事象の分類と日本語母語話者の選択傾向

以下、本研究の被験者と調査の時期・場所について記しておく。カンボジア人日本語学習者は上級の N1 合格レベルの被験者が得られなかったため、N2～N4 合格レベルを被験者とする。

・日本語母語話者

名古屋大学学部生 114 名 (2012 年 5 月 8～10 日に名古屋大学にて実施)

・クメール語を母語とする日本語学習者 (カンボジア人日本語学習者)

日本語能力試験 N2 合格レベル：8 名、同 N3：14 名、同 N4：12 名

(王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の学生 (N2：8 名、N3：6 名、N4：4 名、2014 年 11 月 3 日に王立プノンペン大学外国語学部日本語学科にて実施)、王立法経大学名古屋大学日本法教育研究センターの学生 (N3：8 名、N4：8 名、2014 年 11 月 4 日に王立法経大学名古屋大学日本法教育研究センターにて実施))

以上のアンケート調査をもとに自動詞・他動詞・受身およびねじれ (「を+自動詞」または「が+他動詞」) の選択率を集計した。このうち、本稿で考察の対象とする 20 の表現をまとめると表 1 のようになる。表中の選択率は小数点以下第二位を四捨五入して示してあるため、自動詞・他動詞・受身・ねじれの合計がぴったり 100%にならないもの

クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択についてもある。本稿では日本語の「が+受身」と「を+受身」の区別については立ち入って議論しないため、両者を合わせて「受身」とする。同様に、格助詞と自他動詞のねじれについても議論の対象としないため合わせて「ねじれ」とする。また、表中の「N2～N4」はカンボジア人日本語学習者の日本語能力試験の合格レベルを表す。

本稿では「ねじれ」については考慮しないことにするため、ここからさらに「ねじれ」の回答を除外して、「が+自動詞」「を+他動詞」「が/を+受身」の合計が100%になるように計算し直して、自動詞・他動詞・受身の選択傾向を比較することにする。

表1 自動詞・他動詞・受身の選択テストの結果（数字は選択率%）

被験者	自動詞	他動詞	受身	ねじれ	
事態④ (対象の状態描写・動作主不特定)	1. もう授業（が/を）（始まって/始めて/始められて）いるから急ごう。				
	N4	41.7	33.3	8.3	16.7
	N3	78.6	14.3	7.1	0.0
	N2	87.5	12.5	0.0	0.0
	日本人	99.1	0.0	0.0	0.9
	2. この町には鉄道（が/を）（通って/通して/通されて）いる。				
	N4	25.0	33.3	0.0	41.7
	N3	28.6	21.4	21.4	28.6
	N2	62.5	25.0	0.0	12.5
	日本人	96.5	1.8	1.8	0.0
	3. この雑誌（が/を）一番（売れて/売って/売られて）いるよ。				
	N4	25.0	16.7	41.7	16.7
	N3	71.4	0.0	28.6	0.0
	N2	87.5	0.0	12.5	0.0
	日本人	96.5	0.9	2.6	0.0
	4. 都市開発でこの町の風景（が/を）すっかり（変わった/変えた/変えられた）ね。				
N4	25.0	0.0	33.3	41.7	
N3	42.9	42.9	14.3	0.0	
N2	87.5	0.0	12.5	0.0	
日本人	94.7	0.9	4.4	0.0	
描写・動作主特定 事態⑤	5. 壁に（割れた/割った/割られた）鏡が掛かっている。				
	N4	33.3	41.7	25.0	---
	N3	71.4	14.3	14.3	---
	N2	75.0	25.0	0.0	---
	日本人	100.0	0.0	0.0	---

事態⑤ (対象の状態描写・動作主特定)	6. ドアに鍵(が/を)(かかって/かけて/かけられて)いる。				
	N4	41.7	8.3	8.3	41.7
	N3	71.4	7.1	14.3	7.1
	N2	62.5	37.5	0.0	0.0
	日本人	78.9	2.6	17.5	0.9
	7. 冷蔵庫によく(冷えた/冷やした/冷やされた)ビールがあるよ。				
	N4	25.0	33.3	41.7	---
	N3	14.3	85.7	0.0	---
	N2	12.5	75.0	12.5	---
	日本人	100.0	0.0	0.0	---
	8. ビール(が/を)5℃に(冷えて/冷やして/冷やされて)いる。				
	N4	33.3	16.7	25.0	25.0
	N3	21.4	42.9	14.3	21.4
	N2	37.5	37.5	0.0	25.0
	日本人	29.8	32.5	36.8	0.9
	9. そのコーヒーにはもう砂糖(が/を)(入って/入れて/入れられて)いるよ。				
N4	16.7	25.0	8.3	50.0	
N3	50.0	42.9	0.0	7.1	
N2	37.5	50.0	12.5	0.0	
日本人	89.5	2.6	7.0	0.9	
⑤ ／ ⑨被害	10. 彼のコーヒーには睡眠薬(が/を)(入って/入れて/入れられて)いる。				
	N4	16.7	25.0	16.7	41.7
	N3	64.3	14.3	7.1	14.3
	N2	50.0	25.0	12.5	12.5
日本人	51.8	1.8	46.5	0.0	
事態⑥ (対象の変化)	11. 問題(が/を)(解けたら/解いたら/解かれたら)手を挙げてください。				
	N4	16.7	41.7	0.0	41.7
	N3	7.1	21.4	0.0	71.4
	N2	37.5	25.0	0.0	37.5
	日本人	75.4	20.2	0.0	4.4
	12. さあ、今日の夕食のメニュー(が/を)(決まった/決めた/決められた)よ。				
	N4	17.4	39.1	4.3	39.1
	N3	21.4	71.4	7.1	0.0
	N2	25.0	62.5	0.0	12.5
	日本人	90.4	8.8	0.0	0.9
	13. さあ、肉(が/を)(焼けた/焼いた/焼かれた)から食べましょう。				
	N4	0.0	41.7	0.0	58.3
	N3	14.3	14.3	7.1	64.3
N2	25.0	25.0	12.5	37.5	
日本人	86.0	14.0	0.0	0.0	

クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について

事態⑥ (対象の変化)	14. さあ、スープ(が/を)(温まった/温めた/温められた)から飲んでください。				
	N4	41.7	16.7	8.3	33.3
	N3	21.4	64.3	14.3	0.0
	N2	0.0	87.5	0.0	12.5
	日本人	63.2	36.0	0.0	0.9
	15. さあ、お茶(が/を)(入った/入れた/入れられた)からひと休みしましょう。				
	N4	0.0	33.3	8.3	58.3
	N3	14.3	71.4	0.0	14.3
	N2	12.5	87.5	0.0	0.0
	日本人	47.4	52.6	0.0	0.0
⑥ / ⑪	16. さあ、ケーキ(が/を)(切れた/切った/切られた)から食べましょう。				
	N4	16.7	75.0	0.0	8.3
	N3	0.0	64.3	7.1	28.6
	N2	0.0	87.5	12.5	0.0
	日本人	20.2	78.9	0.9	0.0
事態⑪ (意図的行為)	17. 電子レンジで冷えたスープ(が/を)(温まった/温めた/温められた)。				
	N4	16.7	25.0	33.3	25.0
	N3	21.4	64.3	14.3	0.0
	N2	0.0	87.5	0.0	12.5
	日本人	5.3	90.4	4.4	0.0
	18. おや、髪(が/を)(切れた/切った/切られた)んだ。				
	N4	25.0	33.3	8.3	33.3
	N3	28.6	50.0	14.3	7.1
	N2	0.0	75.0	12.5	12.5
	日本人	1.8	98.2	0.0	0.0
	19. コーヒーにミルク(が/を)(入って/入れて/入れられて)飲む。				
	N4	8.3	50.0	0.0	41.7
	N3	0.0	92.9	0.0	7.1
	N2	0.0	100.0	0.0	0.0
	日本人	2.6	95.6	1.8	0.0
20. 目が悪くなったので、眼鏡(が/を)(変わった/変えた/変えられた)。					
N4	8.3	33.3	25.0	33.3	
N3	0.0	78.6	0.0	21.4	
N2	12.5	75.0	0.0	12.5	
日本人	1.8	98.2	0.0	0.0	

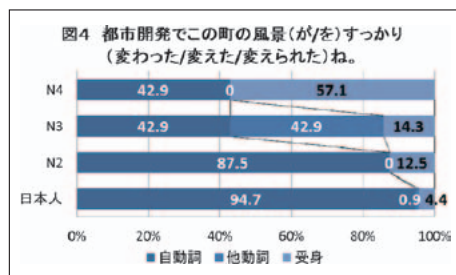
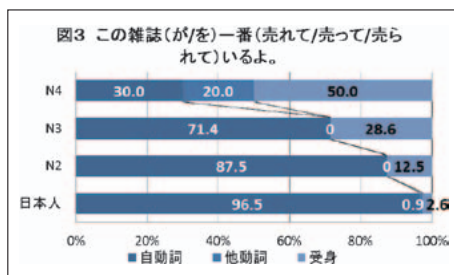
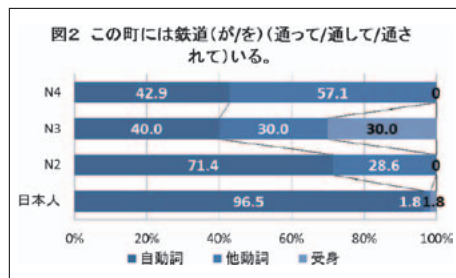
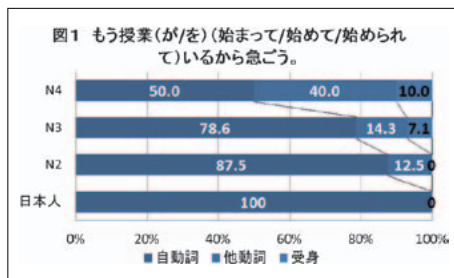
#### 4. 事態別に見る自動詞・他動詞・受身の選択傾向

##### 4.1 対象の状態描写を表す場合（動作主不特定）（事態④）

本節と次節では対象の状態描写を表す場合について論じる。ここでいう対象の状態描写を表す場合とは、人為的行為の結果、対象がそのような状態になっていることを表すもののことである。このうち、本節では動作主が不特定の場合（不特定多数、社会一般）について見る（図1～図4）。

図1の場合、授業を始めるのは先生であっても、授業時間は学校の規則で決まっており、先生の意志で決めるわけではない。また、図2の場合、鉄道を通したのは鉄道会社などであるが、特に敷設者のことに話題が及ばない限り、動作主の行為よりは対象である鉄道の存在に焦点が当たりやすい。図3と図4の場合も同様である。そのため、「授業の開始」、「鉄道の敷設」、「雑誌の売れ行き」、「町の風景の変化」など動作主が不特定で対象の状態に視点が行く場合は、動作主が背景化され、ほぼ100%の日本人が自動詞を選択する。

一方、カンボジア人日本語学習者は、N4レベルでは全体的に自動詞の選択率が低く、日本人に比べて他動詞または受身の選択率が高くなっている。しかし、N2レベルになると自動詞の選択率が上がり、日本人にかなり近づいている。このことから、これらの表現は日本語習得レベルが上がれば、日本人のように自動詞を選択する感覚が身につくことが分かる。



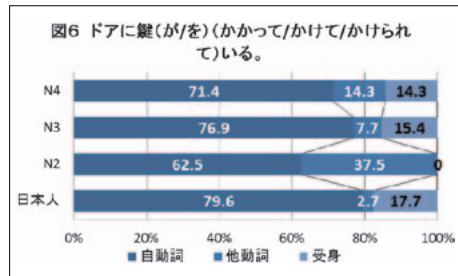
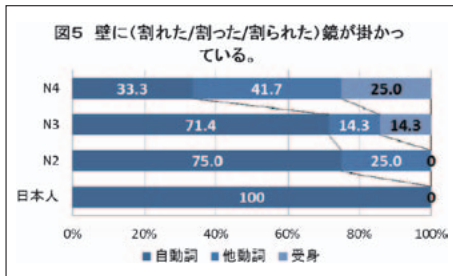
#### 4.2 対象の状態描写を表す場合（動作主特定）（事態⑤）

本節では対象の状態描写を表すもののうち動作主が特定の場合（動作主が不明でも誰か特定の人がいればよい）について論じる（図5～図10）。この場合も日本語では自動詞の選択率が80～100%と高い（図5～図7、図9）。しかし、カンボジア人日本語学習者は必ずしも日本人のように自動詞を選択できないため注意が必要である。

まず、図5の「割れた鏡」の場合、日本人は100%の人が自動詞を選択している。一方、カンボジア人日本語学習者はN4レベルでは33.3%の人しか自動詞を選択しておらず、N3レベルやN4レベルでは70～75%の人が自動詞を選択している。このことから、習得レベルが上がればある程度日本人のように自動詞が選択できるようになることが分かる。

次に図6の「鍵の施錠」を見ると、日本人は79.6%の人が自動詞を選択している。一方、カンボジア人日本語学習者はN4レベルからN2レベルまで70%前後の人が自動詞を選択している。そのため、初級から日本人のように自動詞が選択できることが分かる。

以上に挙げた「割れた鏡」や「鍵の施錠」の例は、特に文脈がない限り動作主の存在は背景化され、対象の状態に焦点が当たりやすい。このような場合はカンボジア人日本語学習者も自動詞を選択しやすいと考えられる。

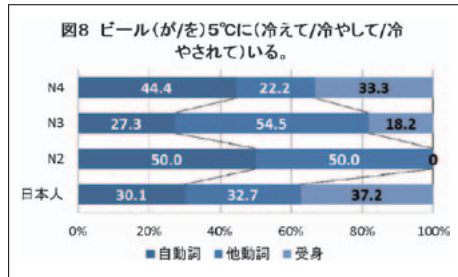
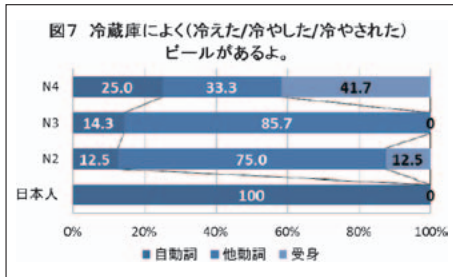


次にビールの冷えた状態を表す図7と図8について見る。図7の場合、日本人は自動詞の選択率が100%であるのに対し、カンボジア人日本語学習者はN3レベルやN2レベルにおいて80%前後の人が他動詞を選択している。このことから、日本人は動作主が特定であっても自動詞を選択しやすいのに対し、カンボジア人日本語学習者は動作主が特定のになると他動詞を選択しやすいことが分かる。

これに対し、図8はビールを5℃にしようとする動作主の目的意識の入るものである。この場合、日本人は単に対象の存在に着目すれば自動詞、動作主の意図的行為に着目すれば他動詞、動作主の行為を感じながらも対象の存在に重点を置いた場合は受身を選択する。一方、カンボジア人日本語学習者はN4レベルやN3レベルでは自動詞、他動詞、受身のいずれも選択されているが、N2レベルでは自動詞と他動詞が半々に選択され、受身は選択されていない。この理由はよく分からないが、図1～図7でもN2になると受身

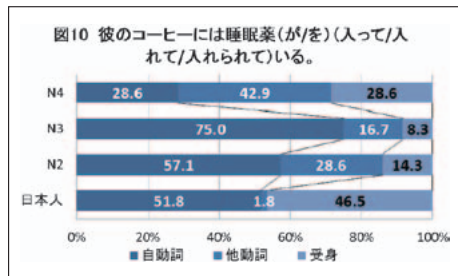
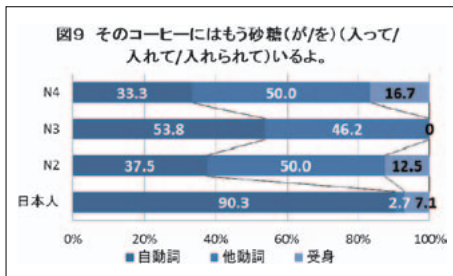


の選択率が低くなるので、何か共通した原因があるのかもしれない。



次にコーヒーに添加物が混じった状態を表す図9と図10について見る。図9の場合、日本人は「砂糖入りコーヒー」の存在に焦点を当てて、およそ90%の人が自動詞を選択している。一方、カンボジア人日本語学習者はN4レベルからN2レベルに至るまで、約50%の人が他動詞を選択している。このことから、カンボジア人日本語学習者は動作主が特定のになると他動詞を選択しやすくなることが分かる。

これに対し、図10は睡眠薬による被害の意味が感じられやすいもので、事態⑤と事態⑨「人為的な被害」の両者にまたがる表現である。この場合、日本人は自動詞と受身の選択率がほぼ半々となり、単に睡眠薬の混入に着目すれば自動詞を選択し、動作主の行為による被害の意味を意識した場合は受身を選択する。一方、カンボジア人日本語学習者は日本人に比べて受身の選択率が低く、他動詞の選択率が高くなっている。この理由もよく分からないが、カンボジア人日本語学習者にとってこのような受身の使用は難しいことが分かる。



#### 4.3 行為の結果による対象の変化を表す場合 (事態⑥)

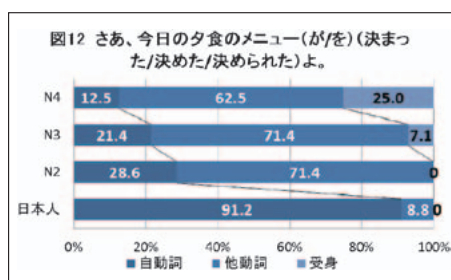
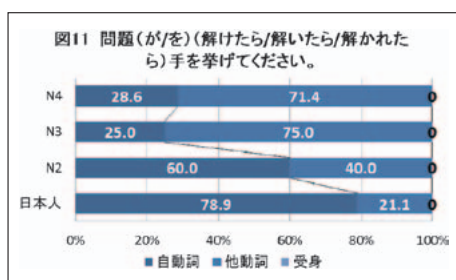
本節では行為の結果による対象の変化を表す場合 (事態⑥) について論じる (図11～図16)。これらは動作主の意志的行為によって対象の変化が生じることを表す表現である。この場合、日本人は自動詞を取りやすい場合もあれば、他動詞を取りやすい場合もあり、どちらも取りやすい場合もあるため、日本語学習者にとって自・他・受身の選択がとりわけ難しい項目となっている (杉村 (2013a,b) 参照)。



クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について

図11の場合、日本人は自動詞を78.9%、他動詞を21.1%の割合で選択している。問題を解くのは動作主の意志的行為によるものであるが、日本人は動作主の行為よりは対象の変化に着目して表現しやすい。一方、カンボジア人日本語学習者はN4レベル、N3レベルでは自動詞の選択率が30%以下しかないが、N2レベルでは自動詞の選択率が60.0%になっている。そのため、初級レベルでは動作主の行為に着目して他動詞を選択しやすいものの、中級レベルになると日本人の感覚に近づくことが分かる。

一方、図12の場合、日本人は91.2%の人が自動詞を選択しているのに対し、カンボジア人日本語学習者はN4レベルからN2レベルに至るまで少しずつ自動詞の選択率が上がるものの、N2レベルになっても他動詞の選択率が71.4%と高い。メニューを決めるのは人間であり、自然に決まることは通常ないため、カンボジア人日本語学習者にとってこのような場合に自動詞を使うという感覚はつかみにくいようである。



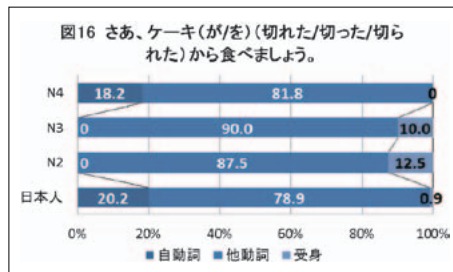
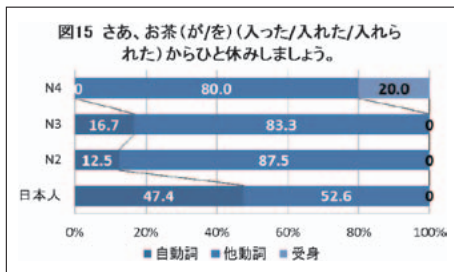
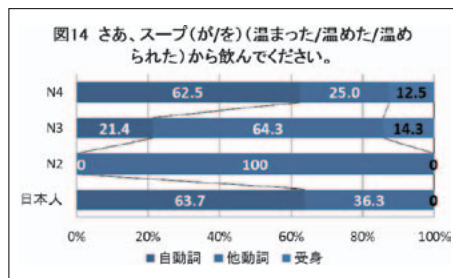
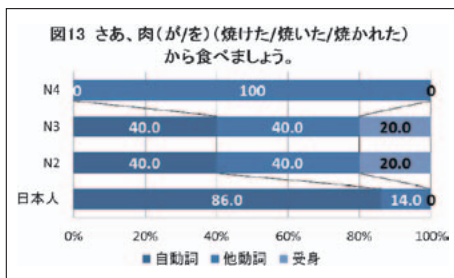
次に図13～図16の例を見る。いずれも同じ飲食物の用意が整ったことを表す表現であるが、日本人の自動詞と他動詞の選択率に大きな違いがある。まず、図13の「焼き肉」の場合、日本人は86.0%の人が自動詞を選択している。一方、カンボジア人日本語学習者は、N4レベルでは全員が他動詞を選択し、N3レベルやN2レベルでも自動詞と他動詞の選択率が40.0%ずつとなっている。これは、日本人はこのような事態を「肉を火にかける→火による肉の化学変化」のように「人為作用」と「自然作用」の二つの過程に分解して捉え、特に誰かのために肉を焼いたという動作主の目的意識がなければ、自然作用の方に焦点が行って自動詞を選択しやすいのに対し、カンボジア人日本語学習者はそのような複雑な捉え方はせず、動作主の意志的行為によるものであれば他動詞を選ぼうとするためであると考えられる。

次に図14の「スープの加熱」の場合、日本人は63.7%の人が自動詞を選択しているが、他動詞を選択している人も36.3%いる。これに対し、カンボジア人日本語学習者は、N4レベルでは62.5%の人が自動詞を選択しているが、N3レベルやN2レベルでは他動詞の選択率が高くなっている。この場合、日本人は「スープを火にかける(人為作用)→火によるスープの温度変化(自然作用)」という二つの過程に分解し、スープの温度変化に焦点が行く人と動作主の「スープを温めてあげよう」という目的意識に焦点が行く人の

割合がおよそ2対1の割合になっている。一方、カンボジア人日本語学習者は、動作主の意志的行為によるものであれば他動詞を選ぼうとするため、他動詞の選択率が高くなると考えられる。

次に図15の「お茶くみ」の場合、日本人は47.4%の人が自動詞を選択し、52.6%の人が他動詞を選択している<sup>2)</sup>。この場合も、日本人は「お茶の葉にお湯を注ぐ（人為作用）→お湯による茶葉からのエキスの抽出（自然作用）」という二つの過程に分解し、特に目的意識に焦点を当てなければ自動詞の「入る」を選択し、目的意識に焦点を当てれば他動詞の「入れる」を選択する。一方、カンボジア人日本語学習者は、N4レベルからN2レベルまで他動詞の選択率が80%以上と高くなっている。このことから、カンボジア人日本語学習者にとっては、このような場合に自動詞を選択する感覚がつかみにくいことが分かる。

最後に、図16の「ケーキのカット」について見る。この場合、「焼き肉」、「スープの加熱」、「お茶くみ」の場合とは異なり、日本人の78.9%が他動詞を選択しているという点で特徴がある。「ケーキのカット」の場合に自動詞が選択されにくいのは、動作主がケーキにナイフを当てた後、ケーキが自然に切れることは通常ないためである（杉村（2013a,b）参照）。この点で図16の事態は、事態⑥と次節の事態⑪「動作主の意図的な行為」の両者にまたがる表現である。また、日本人の20.2%は自動詞の「切れる」を選択しているが、おそらくこれは可能の意味を読み込んで回答したものと考えられる。一方、カンボジア人日本語学習者（N4～N2）も他動詞の選択率が80%以上と高い。これは動作主の意志的行為によるものであれば、他動詞を選ぼうとするためであると考えられる。

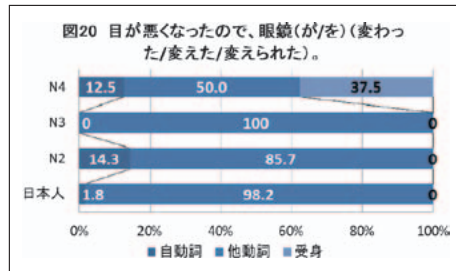
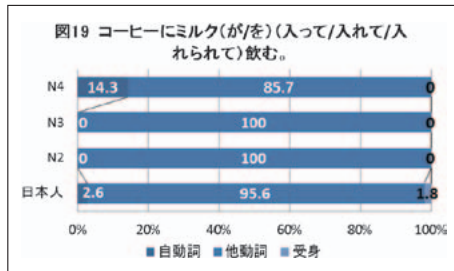
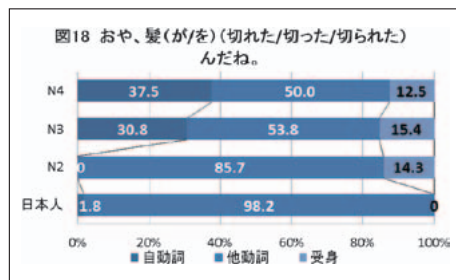
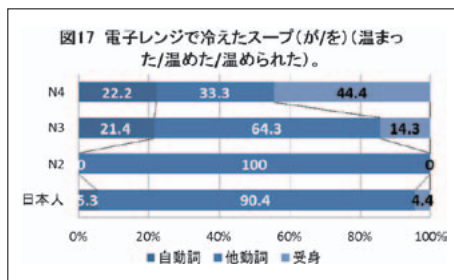


クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について

以上のように、事態⑥は「肉を火にかける（人為作用）→火による肉の化学変化（自然作用）」のように「人為作用」と「自然作用」の二つの過程に分解され、特に動作主の目的意識がクローズアップされる場合には他動詞が選択されるが、そうでない場合には自動詞が選択される表現である。先の「問題解決」や「メニューの決定」の例も、「絡みついた縄を解くように（または凍った氷を溶かすように）問題について思考する（人為作用）→絡みついた縄が解けるように（または凍った氷が溶けるように）脳内で絡まった問題がほぐれる（自然作用）」、「メニューについて思考する（人為作用）→脳内で絡みついた思考がほぐれる（自然作用）」という二つの過程に分解して考えることができる。しかし、このような感覚を身に付けるのは難しいため、事態⑥はカンボジア人に限らず、日本語学習者にとって難しい表現となっている。

#### 4.4 動作主の意図的な行為を表す場合（事態①）

本節では動作主の意図的な行為を表す場合（事態①）について論じる<sup>3)</sup>。動作主の意図的な行為とは「スープを温める」のように動作主が何らかの目的のために当該の行為を行うことを表すものである。この場合、図17～図20のように、日本人もカンボジア人日本語学習者も他動詞の選択率が高くなる。この点で上の事態④～⑥とは異なる。この場合、N4レベルやN3レベルで判断に揺れがあったとしても、N2レベルになると他動詞が選択できるようになる。



## 5. まとめ

最後に本稿で論じた事態④⑤⑥⑩の概要を整理しておく。

・対象の状態描写を表す場合（動作主不特定）（事態④）

日本人は自動詞の選択率がほぼ100%と高い。一方、カンボジア人日本語学習者はN4レベルでは他動詞や受身の選択率が高いが、N2レベルになると自動詞の選択率が高くなり、日本人に近づく。

・対象の状態描写を表す場合（動作主特定）（事態⑤）

日本人は全体的に自動詞の選択率が80~100%と高くなるが、「5℃に冷やしたビール」のように目的意識が入ると自動詞、他動詞、受身のいずれも選択されるようになり、「睡眠薬入りコーヒー」のように被害の意味が入ると自動詞も受身も選択されるようになる。一方、カンボジア人日本語学習者は、「割れた鏡」や「鍵の施錠」の例のように動作主に焦点が当たりにくい場合は日本人のように自動詞を選択しやすいが、「冷蔵庫のビール」や「砂糖・睡眠薬入りコーヒー」のように動作主の存在を意識しやすい場合は日本人のように選択するのは難しい。

・行為の結果による対象の変化を表す場合（事態⑥）

日本語では事態を「人為作用→自然作用」という二つの過程に分解し、動作主の目的意識が強い場合には他動詞を選択し、そうでない場合には自動詞を選択する。これに対し、カンボジア人日本語学習者にはこのような複雑な捉え方が難しく、動作主の意志的行為によるものであれば他動詞を使うという単純な捉え方をしやすいため、全体的に日本人に比べて他動詞の選択率が高くなる。

・動作主の意図的な行為を表す場合（事態⑩）

日本人もカンボジア人日本語学習者も全体的に他動詞の選択率が高い。

なお、杉村（2015d）では同じくカンボジア人日本語学習者の自・他・受身の選択のうち「動作主の不注意による対象の変化を表す場合」（図Aの事態⑩）について論じている。これも合わせて日本人中国語学習者の自・他・受身の選択について考えたい。

付記：本稿は平成25-27年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「日本語学習者の自動詞・他動詞・受身の選択意識と母語転移に関する実証的研究」（研究代表者：杉村泰、課題番号25580111）による研究成果の一部である。

クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について

## 注

- 1) 事態①については杉村（2015c）でも論じたが、比較のために再度取り上げる。
- 2) コーヒーや紅茶の場合は「コーヒーを入れる」、「紅茶を入れる」と言うのが普通で、「<sup>?</sup>コーヒーが入る」、「<sup>?</sup>紅茶が入る」と言うのは不自然である。
- 3) 4.4 節の内容は杉村（2015c）でも論じたことである。

## 参考文献

- 杉村 泰（2013a）「対照研究から見た日本語教育文法 ―自動詞・他動詞・受身の選択―」『日本語学』2013年6月号・第32巻第7号（通巻410号），明治書院，pp.40-48
- 杉村 泰（2013b）「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について―一人為的事態の場合―」『日本語／日本語教育研究』[4] 2013，日本語／日本語教育研究会・ココ出版，pp.21-38
- 杉村 泰（2013c）「中国語話者の日本語使用に見られる有対動詞の自・他・受身の選択 ―被害や迷惑の意味を表す場合―」『漢日語言対比研究論叢』第4輯，漢日対比語言学研究（協作）会編・北京大学出版社，pp.275-286
- 杉村 泰（2013d）「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について―動作主の不注意による対象の変化を表す場合―」『ことばの科学』第26号，名古屋大学言語文化研究会，pp.153-170
- 杉村 泰（2014a）「中国語母語話者における自動詞、他動詞、受身の選択 ―一人為性に対する認識の違い―」『日語教育与日本学研究 ―大学日語教育研究国際研討会論文集（2013）―』，華東理工大学出版社，pp.6-11
- 杉村 泰（2014b）「延辺大学生における日本語の自・他・受身の選択 ―中国語母語話者と中朝バイリンガルの比較―」『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語言文化研究』第三輯（上），延辺大学出版社，pp.548-554
- 杉村 泰（2014c）「台湾人日本語学習者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について」『銘傳日本語教育』第17期，銘傳大学教育暨応用語文学院応用日語学系出版，pp.67-91
- 杉村 泰（2014d）「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について ―非人為的事態の場合―」『名古屋大学言語文化論集』第36巻第1号，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，pp.31-45
- 杉村 泰（2014e）「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について ―動作主の不注意による対象の変化を表す場合―」『ことばの科学』第28号，名古屋大学言語文化研究会，pp.145-156
- 杉村 泰（2015a）「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について ―一人為的事態の場合―」『名古屋大学言語文化論集』第36巻第2号，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，pp.47-62
- 杉村 泰（2015b）「日・中・韓・ウズベク語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択」『東アジア日本語・日本文化研究』第19集 特別号，東アジア日本語日本文化研究会，pp.1-18

杉村 泰 (2015c) 「クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について —非人為的事態の場合—」『名古屋大学言語文化論集』第37巻第1号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.31-44

杉村 泰 (2015d) 「クメール語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について —動作主の不注意による対象の変化を表す場合—」『ことばの科学』第29号, 名古屋大学言語文化研究会, pp.105-120

# 言語文化論集

Studies in Language and Culture

第 XXXVII 卷  
第 2 号

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

Graduate School of Languages and Cultures  
Nagoya University

2016